

実践報告

与謝野晶子の思想と行動を高麗大生と考える

三 橋 広 夫

元日本福祉大学 子ども発達学部教員

The Lesson of Thinking with Korean University Students
about Akiko Yosano's Thought and Action

Hiroo MITSUHASHI

Formerly Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords：与謝野晶子，「君死にたまふことなかれ」，母性保護論争，思想の転換，ナショナリズム

要旨

1904年に「君死にたまふことなかれ」を発表した与謝野晶子は日露戦争を痛烈に批判した。その後も、平塚らいてうや山川菊栄と「母性保護論争」を展開した。そして、ロシア革命に共鳴したり、無産階級への共感をしめし、米騒動をきっかけに寺内内閣の退陣を要求したりした。

ところが、1928年5月から6月にかけて中国東北部を回った晶子はその思想を転換させる。この転換について高麗大生は「途方もない圧迫と脅威」ゆえだと考え、彼女の「強烈な情熱まで発酵させてしまう権力の横暴」こそが問題なのであったと主張した。授業者が、晶子の根底にあるナショナリズムを問題にしようとしたが、学生は晶子の女性解放への熱い思いを感じ取っていたのである。

1. はじめに

2009年から韓国高麗大^{コリョ}で授業をするようになって8回になる。毎年違うテーマで授業をしてきたが¹、高麗大生の積極的な姿勢には学ぶべきものがある。それが翌年にも授業をしてみようというエネルギーになってきたことは言うまでもない。

2013年の「富士山」の授業からは、紀要その他に「まとめ」を発表することができた。2016年の「市川房枝の思想と行動」に続いて2017年は「与謝野晶子の思想と行動」を授業テーマに選び、女性が日本近代をどう歩んでいったかを授業することができた。

さて、与謝野晶子(1878～1942)は、近代日本を駆け抜けた女性作家であった²。夫鉄幹とともに雑誌『明星』を発刊し、石川啄木らにも大きな影響を与えた。

現在、どの中学校歴史教科書にも「君死にたまふことなかれ」が取り上げられ、その思想が評価されている³。ところが、その後の晶子の思想・行動はあまり問題とされない。

そこで、以下の資料から、1900～1930年代の晶子の思想の変遷を追いつつ、そこに通底するものを見てみたい。そして、行動も含めた晶子の思想を韓国の大学生がどう考えるか探っていきたいというのが授業のねらいで

ある。本実践は科目「人物で見た日本の歴史」の中で実施した。受講学生は80名ほどで、大学生の名前はすべて仮名である。授業はすべて韓国語で行った(2017年11月14日)⁴。

2. 授業の実際

(1) 日露戦争と与謝野晶子 「君死にたまふことなかれ」を読む

『みだれ髪』(1901年)を刊行した晶子は、雑誌『明星』に「君死にたまふことなかれ」⁵を発表した(1904年9月号)。女性の恋愛感情を詠んだ斬新な作風が当時賛否両論を巻き起こした『みだれ髪』の作者である晶子の歌だということで、大きな影響を及ぼした⁶。

例えば、晶子の才能を評価していた文芸評論家大町桂月(1869~1925)は、『太陽』10月号で「草芥の一女子、義勇公に奉すべしとのたまへる教育勅語、さては宣戦詔勅を非議す。大胆なるわざ也……家が大事也、妻が大事也。国は亡びてもよし、商人は戦ふべき義務なしと言ふは、余りに大胆すぎる言葉也」と非難した⁷。これに対し晶子は、同年『明星』11月号の「ひらきぶみ」で、私は日本を愛しているし、その気持ちは誰にも負けない。そして、今は亡き父は弟に人を殺せとは教えなかったし、その教えを受けとめて「人間の心もち候弟に、女の私、今の戦争唱歌にあり候やうのこと歌はれ候べきや」⁸と反論した⁹。

言うまでもないが、ここには晶子と桂月の間に国家観をめぐる鋭い対立が内在していることが見てとれる。晶子は、国家は個人の生を支持し、保護するべきだとするのに対して、桂月は国家が危急のとき国民は自己の命を投げ捨てても国家のために戦わなければならないというのである。

ここで、晶子が反戦というよりも、たえず自らの体験によって確かめながら真実を追究していく姿勢を持っていたことを注視すべきである。そのため、晶子は日露戦争についてさらに深い認識を獲得していく。数年後には「日本の男子は唯その勝利を見て、かの戦争に如何なる意義があったか、如何なる効果をかかの戦争の犠牲に由って持ち来したか、戦争の名は如何様に美しかったにせよ、真実をいえば世界の文明の中心思想に縁遠い野蛮性の発揮ではなかったか、というような細心の反省と批判とを徐ろに考える人は少い」と、当時の男性の日露戦争観を批判するようになる¹⁰。

授業では、次の資料1・資料2を読んで晶子の考えをどう思うか考えさせた。

資料1

君死にたまふことなかれ 旅順口包囲軍の中にある弟¹¹を歎きて

ああ、弟よ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ。
末に生れし君なれば
親のなさけは勝りしも、
親は刃をにぎらせて
人を殺せと教へしや、
人を殺して死ねよとて
廿四までを育てしや。

君死にたまふことなかれ。
すめらみことは、戦ひに
おおみづからは出でまされ、
互に人の血を流し、
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人の誉れとは
おほみこころの深ければ
もとより如何で思されん。

……
(『明星』1904年9月号¹²)

堺の街のあきびとの
老舗を誇るあるじにて、
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ。
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとても、何事ぞ。
君は知らじな、あきびとの
家の習ひに無きことを。

資料2

「少女と申す者誰も戦争ざらひに候。御国のために止むを得ぬ事と承りて、さらばこのいくさ勝てと祈り、勝ちて早く済めと祈り……当節のやうに死ねよ死ねよと申し候こと、又なにごとにも忠君愛国などの文字や、畏おほき教育勅語などを引きて論ずることの流行は、この方却て危険と申すものに候はずや」
(「ひらきぶみ」、『明星』1904年11月号)

弟が敵軍に包囲されたことを心配する内容の詩だが、この詩を通して晶子が戦争を否定的に感じていることがわかる。特に「旅順の城はほろぶともほろびずとても何事か」という一節から彼女は国家のための大義より個人の家庭と幸福を優先視していることがわかる。私はこのような彼女の思想が理解できる。愛する弟が国家のために戦って死ぬ危機に直面し、弟が本当に望んで戦争に行ったのではなく、天皇の命令で戦争に行っただと考えていたのだ。(パク・チヘ、1年)

生命への愛情を兼ね備えた晶子は、天皇が自ら戦争を起こしながらも本人は血を流す戦争に出ていかず、むしろ日本国民を前面に出して甘い汁を吸う行為を迂回的に批判している。露骨な批判ではなく「おほみこころの深ければもとより如何で思されん」という一節で迂回的に、文学的に表現した晶子の用心深さが見られる。そうして「旅順の城はほろぶともほろびずとても

も何事か」と書いている。これは両親の店の家業を継ぐ弟の命を重要だと考え、また晶子の思想は資料 2 を通じてみれば戦争を嫌い、戦争が早く終わるよう祈っている。(イ・ヒョクチェ, 1 年)

日露戦争に参戦した弟を賛えて書いた歌詞が悲しいながらも一方ではその時代的としては進歩的な思想を表わしている。特に、「すめらみことは戦いにおおみずからは出でまされ」の一節にこのような思想がよく現れているが、時代の要求に順応せず、これを批判的に見る問題意識を持っていた点で見習う価値がある。(キム・ジョンヒョン, 2 年)

戦争に行き敵地にいる弟の安全と危機を心配し、戦争に対する否定的な立場を見せているが、資料 2 では戦争自体に反対するというよりも、国のための戦争ならば勝って早く終わるよう願う比較的消極的な反対の態度を見せている。当時の帝国主義社会で戦争を熱烈に擁護する態度を見せないこと自体がすごいが、戦争に対する強力な反対を主張することができない限界を見せていると考える。(ソ・ジュノ, 4 年)

晶子は、戦争に対して否定的であり、「個人の家庭と幸福を優先視している」(バク・チヘ)し、時代の要求に批判的だ(キム・ジョンヒョン)が、同時に「迂回的に批判し」(イ・ヒョクチェ)、「比較的消極的な反対の態度」(ソ・ジュノ)だとしている。晶子の考えには賛成だが、限界もあるとする意見である。

(2) 1910 年代の与謝野晶子の思想 平塚らいてうとの「母性保護論争」

平塚らいてうが晶子に『青鞥』創刊への協力を依頼したのは 1911 年 6 月のことだった。初回の訪問のときには返事が芳しくないと思っていたが、実は違っていた。数日後に晶子から送られてきた「そぞろごと」という数編の詩稿を見てらいてうは仰天した。中でも冒頭の「山の動く日」には「山の動く日来る / かく云へども人われを信ぜじ / 山は姑く眠りしのみ / その昔彼等皆火に燃えて動きしものを / されどそれは信ぜずともよし / 人よああ唯これを信ぜよ / すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる」と書かれていた¹³。これに呼応する形でらいてうは「元始、女性は太陽であった」をつくった。しかし、後に女性解放の道筋をめぐって二人は激しい論争をくり広げる。これが「母性保護論争」である。

従来、母性保護論争は「『母性保護』というごく日常的な、ある意味ではきわめてつましやかな題材から出発しながら、日本における『女性解放』の基本的見取り



前列右より長女八峰, 3 男麟, 次女七瀬, 6 女藤子, 晶子, 4 男アウグスト (昱), 鉄幹, 5 男健, 後列右より長男光, 甥武田米太郎, 次男秀 (1919 年)。ここには写っていないが, 3 女佐保子, 4 女智子, 5 女工レンヌ, そして生後 2 日で早世した 6 男寸と, 晶子は 12 人の子を産んだ。さらに, 養子の譲がいる。京都府立京都学・歴彩館蔵。

図 (多分に抽象的, あるいは空想的ではあるが) を提出し, その後の婦人運動史が直面する問題, 辿るコースのいくつかをいわば萌芽の形で数多くの内に含むことができた, いわば女性解放のスタートラインを規定した論争とされてきた¹⁴。

「母と子どもの権利」という観点から, この論争に「注目したのは, 母であることに生き甲斐を求め, その意味で最も子どもを大事に考えたと思われるらいてうの論理よりも, 『個』の確立への最も強烈な意志をもって晶子の論理のなかに, 子どもの権利思想をよりふくらます可能性が秘められていた点である」¹⁵とする主張がある。母と子の関係を豊かにする「親の人間としての成長発達」の可能性は, 母性にこだわるらいてうよりも労働による個の確立を求める晶子の論理のほうが強く表現しているからである, という。

つまり, 晶子とらいてうの論争は, 女性の生き方の方向として, 「自労自活」か, 「母性中心」か, 女性の経済的自立の方法として, 職業的独立か, 国家による保護か, 子ども観, 養育観と養育方法をめぐって, 「子ども自身のため子ども」観か, 「国家・社会のため子ども」観か, また養育の自力主義か, 国家による養育援助か (母性保護) か, となる¹⁶。

そこで, 以下の資料 3 を読んで晶子・らいてうの考えをどう思うか考えさせた¹⁷。

資料3

	与謝野晶子	平塚らいてう
母子扶助	<p>私は欧米の婦人運動に由つて唱へられる、妊娠分娩等の時期にある婦人が国家に向つて経済上の特殊な保護を要求しよう云ふ主張に賛成しかねます。</p> <p>既に生殖的奉仕に由つて婦人が男子に寄食することを奴隷道徳であるとする私達は、同一の理由から国家に寄食することをも辞さなければなりません。婦人は如何なる場合にも依頼主義を採つてはならないと思ひます。</p> <p>(「女子の徹底した独立<紫影録(抄)>」、『婦人公論』3-3, 1918年3月号)</p>	<p>母性を保護すると、しないとは、直接保護される母や、母を通じて保護される子供の幸福ばかりでなく国家の利害に大関係のあることですから、国家の立場としても行ふべき必要な政策なので、決して慈善救済の事業ではありません。</p> <p>(「母性保護論争に就いて再び与謝野晶子氏に寄す」、『婦人公論』3-7, 1918年7月号)</p>
母性観	<p>平塚さんは母性を絶対に尊重して居られることが解ります。私は人間の生活の最上の価値を父たり母たることに偏衣させて考へることを欲しません。私が賢母良妻主義に反対するののも一つは同じ理由からです。勿論父たり母たること、人生の重要な内容の一つとして相対的の価値を認めることは何人にも譲らない積りで居ります。併し「婦人が母たることに由つて」のみ最上の幸福を実現し得るものとは決して考へて居りません。</p> <p>(「平塚さんと私の論争<粘土自像>」、『太陽』24-7, 1918年6月号)</p>	<p>元来母は生命の源泉であつて、婦人は母たることによって個人的存在の域を脱して社会的な、国家的な存在者となるのでありますから、母を保護することは婦人一個の幸福のために必要なばかりでなく、その子供を通じて、全社会の幸福のため全人類の将来のために必要なことなのであります。</p> <p>(「母性保護の主張は依頼主義か<与謝野、嘉悦二氏へ(抄)>」、『婦人公論』3-3, 1918年3月号)</p>

母親は生命の源泉であり、その生命が国をなすので女性が国の平和と発展に大きな貢献をすると見ることが出来る。だが、晶子は女が子どもを産むことを「生殖的奉仕」と称しているが、この点は同意できない。

だが、彼女の主張によれば、女性が母親ということによってのみ幸福を感じるのではなく、一歩進んで自分自身の自我を実現しつつ自身の夢をかなえながら幸福を感じることができるようになるべきだというのだ。彼女の根本的なこの主張には同意する。もしこの主張のように、女性が直接自我を実現しつつ世の中の発展と平和に寄与するならばそのときこそ真の幸福を実現することができるだろう。(パク・チヘ)

(晶子は)妊娠分娩女性の特別な保護を要求する主張に賛成できないと主張する中で女性が独立して存在しなければならず、男性に依存してはならないと主張している。だが、女性にしても男性にしても状況によっては特別な保護を要求するべきだ。また、妊娠分娩時期の女性は特別な保護を受けなければ妊婦と胎児の健康を保護できないため、国家的次元で実施すべきだというらいてうの意見に賛成だ。(同時に)女性は母親というものによってのみ最上の幸福を実現できるわけではないとした晶子の主張は正しい。また、女性はすでに生殖的奉仕を通じて男性に寄生することを奴隷道徳だとする主張に同意する。(イ・ヒョクチェ)

1918年に寄稿された文章は驚くほど完全に独立的な女性像を主張していると見られる。今日の視線から見ても破格的で進歩的なアイディアを持っていたが、特にこれは妊娠分娩などの時期にある女性が国家の保護を受けなければならないということに懐疑的で、女性と母親を一致させてしまう時代的要求にしっかりと反論している。当面の安心と便利さのために全体的な女性の主体を失うことは止めようという考えが感銘深い。(キム・ジョンヒョン)

らいてうは女性の役割である「生命妊娠」を強調し、それが社会的・国家的に人口増加と国力伸張に役立つことから、女性が国家から保護を受けるべきだと主張した。反面、晶子は女性の役割を単に「母親」に限定しなかった。女性の可能性と潜在力をよりいっそう高く見たのであり、そのために国家から保護されるべき存在ではなく、主体的・能動的な社会的構成員にならなければならないと主張した。晶子の主張は今見ても非常に進歩的だと考える。(ソ・ジュノ)

「自我を実現しつつ自身の夢をかなえ」(パク・チヘ) ようとする「主体的・能動的な」(ソ・ジュノ) 晶子の姿勢に共感し、「女性と母親を一致させてしまう時代的要求にしっかりと反論している」(キム・ジョンヒョン) ことにも賛成だとする

一方では女性は「男性に依存してはならない」ものの「女性にしても男性にしても状況によっては特別な保護を要求するべきだ」(イ・ヒョクチェ) と社会的な福祉の充実は今(の韓国)でも課題なのだと主張する。

(3) 1920年代の与謝野晶子の思想 「軍備撤廃の第一歩」, 「無産者の黎明期」を読む



軽井沢, 弔堂の莫哀山荘にて (1934年)。前列右から二番目が弔堂, その左が晶子。香内信子『与謝野晶子 昭和期を中心に』ドメス出版, 1993, 73ページ。

晶子は、1918年のシベリア出兵に反対し¹⁸、1922年には筆頭发起人となって露国飢餓救済婦人有志会をつくった。同時に米騒動の原因は、「物価の暴騰を激成した成金階級の横暴と、その成金階級の利益を偏重して、物価の調節に必要なあらゆる応急手段を早く取らなかった上に、意義不明の出兵沙汰や、時機を失した調節令などに由って、一層米価の暴騰を助長した軍閥内閣の秕政とに対する社会的不平を挙げねばなりません」¹⁹とし、さらには「寺内内閣が天下の器でないことは、このたびの暴動を激成したことに由って余りに明かになりました。国民は既に拳^{こぶ}って寺内内閣の弔鐘を打っております」²⁰として寺内内閣の退陣を要求している。

また、晶子は「憲政の父」尾崎弔堂（行雄）に歌を教えている。そうした交流もあってか、弔堂が推し進めたワシントン会議（1921年）における軍縮を「軍備撤廃の第一歩」ととらえ、期待していた²¹。これは、『横浜貿易新報』（1920年2月29日付）に「唯だ一つ、あなたに／お尋ねします。／あなたは、今、／民衆の中に在るのか、／民衆の外に在るのか、／そのお答え次第で、／あなたと私は／永劫、西と東に／別れて仕舞ひます」という詩（「春宵雑曲」）を投稿したことからもわかる。

ここで、以下の資料4・資料5を読んで晶子の考えをどう思うか考えさせた。

資料4

「戦争で買った平和は決して真の平和で無く、いつでも戦争で蹂躪される平和です。武力を持つて国家の維持と発展とを企てようとする帝国主義や軍国主義は、今後の愛国者の相容れないものです。旧式な愛国者は

国家のために個人を犠牲にして何とも思はなかつたのですが、国家を以て一切の個人の各々の福祉を増進し、人類の平和な共存を保障するための機関として考へる今後の愛国者は人類共存の理想と極端に相容れない戦争其物の絶滅を考へずに居られません。

軍備の制限はこの戦争の絶滅に向つて纔に第一歩を進めるものです。主唱者が何れの国民であらうとも、正義の前には喜んで賛意を表したいと思ひます。」

（「軍備撤廃の第一歩」、『読売新聞』1921年11月15日、『与謝野晶子評論著作集 第18巻』龍溪書舎、2002、396ページ）

資料5

「私個人の芸術的感性は「闘争」状態を好まないが、その荊棘^{けいぎよく}の道を分けて後に人類の真の幸福が得られるものなら「闘争」も或は止むを得ない。……地上に無産者一元の社会を実現する日が来たら、すべてが人並の経済生活^{きんぎん}を均霑^{きんせん}すると共に、すべてが勤労者、有教育者、芸術学問の理解者である事、是れが私の祈願である。」（与謝野晶子「無産者の黎明期」、1928年1月8日、『定本与謝野晶子全集 第19巻 評論感想集6』講談社、1981、405ページ）

晶子が味わった経験に照らして考えれば、晶子が戦争に対して否定的な感情を持っていることに絶対に同意することができた。ところが、もし晶子の弟にそのような悲惨な経験がなかったとすれば、それでも晶子は戦争に対して否定的な感情を持ったのだろうか？ 気がかりだった。だが、この心配は資料5を通じて解決された。晶子が反戦的^{はんせん}な感情を持つことになったのは個人的経験だけでなく、戦争で得た平和は結局再び戦争で壊れるという事実を何度も経験しつつこれを真理として受け入れていったのである。まさにここで「戦争」が彼女にあっては人類の真の平和を取り戻す存在ではなく、したがって彼女は戦争をなくすべきだと主張するのだと理解することができた。（パク・チへ）

戦争なきユートピア、平和な世の中になるよう祈っている。軍備を制限することを主張していたのはおそらく日本人だけではなくと思われる。それにもかかわらず、国籍を問わず正義の前に承服する姿を見せながら、もう一度軍備撤廃とともに人類平和を祈る晶子の姿勢がかいま見える。国家は一人ひとりの集合で成り立つが、その一人ひとりの個性が尊重され、その個性と才能をよく啓発してみなが豊かな暮らしをする国になるよう希望している。この時代はまだ福祉という言葉が生まれる時代ではなかったにもかかわらず、とても進歩的な言及をしたと見られる。また、晶子は戦争で買った平和は決して真の平和でないと述べ、い

つでも戦争で蹂躪される平和だとして武力で国家維持と発展を企てようとする帝国主義・軍国主義は今後愛国者と両立できないという話から、晶子は戦争に反対する、とても進取的な女性だったと思った。この点で晶子の行動と思想に同意したい。(イ・ヒョクチュエ)

晶子は婉曲に平和主義を前面に出している。戦争や闘争に全面的に否定的であり、これが消えるとき初めて平和が訪れると主張する。このような反戦主義に同感する。戦争による国家的損失や人命被害を見れば戦争は正当化できないからだ。(キム・ジョンヒョン)

資料4で晶子は完全な反戦主義路線を採ったと見られる。資料5で言及した「闘争」はプロレタリア革命のような無産者階級の闘争を言ったのだ。晶子は日本が戦争を終結させて階級平等の社会に進むよう願ったのだらう。階級平等の社会では全人民が同等な待遇を受けるから晶子が持っている進歩的な女性観を成立させるにも明らかに好都合だったのだらう。また、晶子の女性主義や反戦主義などに照らしてみるとアナーキズム的要素もかなり作用したと思われる。(ソ・ジュノ)

パク・チヘは「戦争で得た平和は結局再び戦争で壊れるという事実を何度も経験しつつこれを真理として受け入れていった」と晶子の思想に共鳴している。イ・ヒョクチュエも「軍備撤廃とともに人類平和を祈る晶子の姿勢」に賛同しながら、晶子を「戦争に反対する、とても進取的な女性だ」と評価した。なぜ反戦主義に同感するかと言えば、「戦争による国家的損失や人命被害を見れば戦争は正当化できないからだ」とキム・ジョンヒョンは自分の考えを明らかにしている。

また、ソ・ジュノは、晶子の反戦主義が「階級平等の社会に進むよう願った」ことへと進んでいったことを喝破した。

(4) 総括的に 特に「満蒙への移住」を読んで考える

だが、こうした晶子の論調にも陰りが見え始める。転機は南満州鉄道株式会社の招待で「満洲」・「内蒙古」などを旅行したことにあるようである。この旅行は満鉄の宣伝工作の一つであった²²。1928年5月5日から6月17日までの1カ月以上にわたる旅行で、晶子は今までの認識とは袂を分かったと言っても過言ではない。「無産者の黎明期」という文章で「私個人の芸術的感性は『闘争』状態を好まないが、その荊棘の道を分けて後に人類の真の幸福が得られるものなら『闘争』も或は止むを得ない」と書いたのは、1928年3月18日のことだった²³。

旅行後に発表した『満蒙遊記』によれば、「何よりも愛と趣味に和らげられた気分感情の交響」によって「(日中の)民族対民族の心からの親善融和」²⁴を追求するというのが晶子・鉄幹の考えだった。しかし、この時期の政府の一部や軍部にとってそうした「交響」などは文人のたわごとすぎなかったといえる。

ともかく、旅行中の5月30日に彼らは張作霖爆死事件に遭遇する。奉天の大和ホテルに宿泊した際「へんな音が幽かに聞えた」という。満鉄の所長や朝日新聞支局長からも話を聞き、さらに日本領事を訪問しているが、この事件について所感を述べてはいない。その後旅順を訪れ、日本の植民地経営の実態に触れる。「私は旅順の戦跡を二度訪うて、白玉山の納骨堂を拝し、二〇三高地、東鶏冠山砲台、旅順港口閉塞船の跡などを遍歴して、ここで陣没した四万の若い日本人は何を思つてその命を砲火の下に委ねたか、その後の日本人の満蒙に於ける施設が、其等の悲しい犠牲者の志しを満足せしめてゐるか。死者の最後の慰めは、自分達の兄弟がせせこましい本土を離れて、自由快活な労働生活を此の新しい領土の中に開いてくれるであらうと云ふ希望では無かつたか」²⁵と記すほどだった。

一方、この時期に「武力の脅威を以て支那本土にも満蒙にも臨むべきでない」²⁶し、武力を背景として進出しようとする「対支事業家」を中国から撤退させるべきと提言していること、中国の政治家は日本の政党政治家よりも世界をよく知っているのだから宇垣軍縮、幣原外交をさらに推進すべきとしていることからまだ晶子は転向していないとする研究もある²⁷。だが、後に晶子自身が「一時の平和論と平和現象とに眩惑されて、それを固定的なものに誤解し、三十年来の流動的な見解を此点について曇らせた」²⁸として、それが「満蒙へ旅行した頃」からだとして自省していることから、この時点で少なくとも認識転換の転機となったと考える。こうした転向を支えたのは晶子に内在化されていた植民地意識かもしれない。そうであれば、すでに1910年9月に「韓国に綱かけて引く神わざを今の現に見るが尊さ」(『万朝報』, 1910年9月3日)という歌を発表している(韓国併合条約の発効は同年8月29日である)ことや、1911年の「日韓併合条約の様な形式は空前だ。世界に先例の無い事だと言ふ。併しわたしは然うで無いと思ふ。日本では人皇以前に既に立派な先例がある。大国主の御国譲りが其れである。須佐之男、大国主、少名彦は朝鮮に王となり乃至朝

鮮を領土として高間が原朝廷に対峙した独立国の主権者であつた。両国の併合は諾尊以来の宿題であつたのを天照大御神の世になつて漸く解決する事が出来た」²⁹ という認識が問われなければならない。ただし、晶子だけでなく当代日本人の植民地意識をも視野に入れなければならないことは言うまでもない³⁰。

ともかく、満州事変以後はこの認識転換が明確になる。1931年9月27日付『横浜貿易新報』に「東四省の問題」という文章を載せるが、ここにそれがよく現れている。曰く、満州事変の責任は中国の軍閥政府にあるのだから、日本は「蒋介石も張学良も快速に善後策を講じないと云ふなら、東三省の支那国民自身が独立して初めて国民の実力に本づく平和な新政府を建設し、日本と交渉して真実に鞏固な共存共栄の道を開くがよいではないか」³¹ と声高に主張する。なお、1932年6月には、「日本国民朝の歌」³² を発表して「第一次上海事変の日本人の忠義と正義」を讃えている。

日中戦争が本格化するなか、すでに夫鉄幹とも死別していた晶子は、『新新訳源氏物語』³³ を完成させ（1939年9月）、1923年の関東大震災で原稿をすべて灰燼とした晶子にとって最後の大きな仕事となった。そして、1942年1月、「詔勅を拝して」と題して六首を歌い一つ永眠する。その一首が「水軍の大尉となりて我が四郎み軍にゆくたけく戦へ」³⁴ である。

ここでは、中国や朝鮮についての認識がよく現れている資料6・資料7を選んで、意見を書かせた。ただし、それまでの晶子の歩みをふり振り返りながら総括的に論じさせた。

資料6

「軍人や支那浪人の立場から考へることは、もとより百害あって一利も無い。その事は張作霖の死が証明してゐる。私の考へる所では、国民としての立場から、また支那人の幸福をも計る隣人の立場から、日本の農民の中の労働精神を失はない堅実な青年男女を、山東の支那農民や朝鮮の農民が近年百万二百万と満蒙に入り込むやうに移住する方法を講じて欲しいと思ふのである。南米のやうな遠い所でなく、冬の気候も東北や越後のやうに積雪を見るのではない。大河の流域には自然の肥肥にも富んでゐる。昔からの労働気質を伝えて都会の享樂の悪習に染まない農家の子女なら、屹度勤儉な支那農民と並行して好い成績が挙げられるに違ひない。殊に我国の農家の子女は、無智な支那朝鮮の移民とちがつて、普通教育を受けてゐる点が遙かに優越してゐる。」（与謝野晶子「満蒙への移住」、『横浜貿

易新報』1928年12月24日、『与謝野晶子評論著作集 第19巻』龍溪書舎、2002、523ページ）

資料7

「今度の満洲事変が決して一時の突発でなくて、彼国の軍閥政府がその積み上げた排日侮日の思想及び言動に由つて自ら招いた災禍である事の証明となるものである。日本はその排日行為に対して久しく隠忍を重ねた。終に忍び切れずして出先の陸軍が非常手段の自衛策を断行した。この非常手段は決して好ましい事でないが、かやうな措置を取るに至らしめた責任が彼国の軍閥政府にある」（与謝野晶子「東四省の問題」、『横浜貿易新報』1931年9月27日（最近の感想）」、『鉄幹晶子全集 27』（勉誠出版、2009、123ページ）。

晶子が当時進取的で率直な性格の持ち主だったという気がした。「君死にたまふことなかれ」という詩を発表したとき多くの人々が彼女に「愛国を理解しない俗物」、「非愛国者」、「逆賊」と非難したという。当時には「愛国」が重要だったため戦争に対する否定的な発言と、天皇に対する非難が社会をばっさりといっくり返したのだ。「愛国」教育を受けていたにもかかわらず、彼女は進取的に無謀な戦争を行う天皇に対して厳しい忠告を与え、受動的な女性像に反対する意見を出したりして世の中を改革するために多くの文学的努力を加えた。彼女の思想に全面的に同意するわけではないが、女性が声を出すことも大変だったあの時代に自身の思想をためらうことなく文学的に表現した彼女を尊敬する。（バク・チヘ）

晶子は軍人が統治する軍閥政府を止めて、勤勉に生きる農民が教育をさらに受けて彼らを中心とした国家の姿を指向する。また、軍閥政府が起こした満州事変の矛盾を指摘し、純粋な農民が主軸になって彼らが芸術、政治、経済、教育など専門家になって生きる国を指向する。戦争がない国、平和な国、個人、家庭、民族、世界が平和な国になるよう望み、女性が賢母良妻像に閉じ込められるのではなく、男性と同等に両立共存するよう望んでいる。これはその当時の時代に比べて進歩した考えを持っている女性であり、社会主義的な考えを持っていることもわかった。（イ・ヒョクチュエ）

すべての資料を合わせて確実なのは晶子が真の愛国者だったということだ。盲目的な愛は愛国でない。国の、時代の要求に順応するのではなく、善し悪しを問いこれに対する意見を勇気をふるって表現できたとき、初めて愛国が実現されるといえる。晶子は多くの社会的現象に対して懐疑的、批判的だったが、これが日本に対する愛のもう一つの表現ではなかったか。さらに、彼女の主体的、独立的な思想は今日のわれわれが学ぶべき価値がある。（キム・ジョンヒョン）

晶子は露日戦争当時から戦争に否定的だった。真の人類の平和のためならば直ちに戦争を中断して軍備を縮小するよう主張するほどだった。しかし、1928年12月に書いた文章を見ればそれまで持っていた思想とは違って非常に帝国主義的思想に基づいた内容が含まれている。日本民族に比べて朝鮮や中国民族の劣等さを指摘しつつ日本人を満州、モンゴル地域に移住させて彼らをしてその地域を発展させようという主張は社会進化論的論理に立脚したものと見ることができる。これに留まらず、1931年の満州事変を日本の大陸侵奪の野心と見るのではなく、中国軍閥の脅威によって日本がやむをえずそれに対する自衛権を行使したと主張している。晶子が以前に叫んでいた反戦主義思想とは完璧に変わってしまったことを肯定的に見ることはできない。

それにもかかわらず、注目すべきは彼女の女性主義的観点だ。その当時だけでなく現在も女性の「母親」という役割に対してその重要性を強調している。しかし、晶子はその談論が女性の可能性を制限すると考え、女性が一人の主体として堂々と行動するべきだと説明した。これは後に晶子が言及する真の平和と階級平等の社会に進まなければならないという主張の事前段階ともいえる。このような真の意味の性平等を主張した部分については、現代社会を生きる私たちにとって、特にジェンダー葛藤がますます激しくなっている今の時点で示唆するところが大きいと見る。(ソ・ジュノ)

何はともあれ、「女性が声を出すことも大変だったあの時代に自身の思想をためらうことなく文学的に表現した彼女を尊敬する」(バク・チヘ)、「晶子は多くの社会的現象に対して懐疑的、批判的だったが、これが日本に対する愛のもう一つの表現」(キム・ジョンヒョン)だった。女性が「男性と同等に両立共存するよう望んだ」ことは1930年代の晶子の思想や行動を経ても消えるものではないと積極的に評価している。また、ソ・ジュノも「晶子が以前に叫んでいた反戦主義思想とは完璧に変わってしまったことを肯定的に見ることはできない」が、「彼女の女性主義的観点」は今の私たちにとって「示唆するところが大きい」としている。

ここで学生をもう一人登場させたい。

まず資料1~5を見ると、晶子は現代の人々が評価するに、とても進歩的で人権と平等の問題にとっても関心があって考えが深かった人という気がした。しかし、このことと資料6と7は相反し、矛盾している。反戦主義に基づいて主張していた人類の平等と性平等の代わりに、資料6と7では開戦への賛成と人類の平等を

無視したまま日本が優れていて他の国は劣等だという内容が出てくる。それだけでなく、そういう戦争の責任は戦争を始めた日本にあるのではなく、相手国にあるという発言までし、彼女の晩年の姿はそれ以前の人生を完全に否定するものだった。このような晶子の晩年の反転の原因は何だろうか。

私はこのような晶子を見ながら詩人金芝河(キムジハ)を何となく思い出した。朴正熙(パクジョンシ)のような独裁政権に対する強烈な抵抗詩を書きながら、わが国の民主主義の英雄の一人として称賛された金芝河は、朴槿恵(パククネ)政権を支持することによって自身が歩んできた抵抗の性格を色褪せさせた。このような行動の裏面には、抵抗の過程で途方もない圧迫と脅威に追われたため、結局そういうトラウマに苦しめられる精神的疾患で晩年には多少安定した選択をせざるをえなかったのだ。これと同じように晶子もまたその時代に非常に進歩的な性格と天皇に対する批判意識などによって途方もない圧迫と脅迫に苦しめられたため、晩年には彼女の考えが折れなければならなかっただろう。一生の間持っていた強烈な情熱まで発酵させてしまう権力の横暴。そのこともまた一生をかけて平等を叫んでいた彼女の晩年から学ぶことができるのではないだろうか。(ウ・ボミョン、1年)

「晶子の晩年の反転の原因」を考えたウ・ボミョンは、金芝河を想起した。金芝河は朴正熙時代に長編詩『五賊』や『苦行 獄中におけるわが闘い』などを著し、民主化運動をリードした。何度も死刑判決を受けながらも、屈することなく闘った彼が朴槿恵を支持したのは「途方もない圧迫と脅威」ゆえだとウ・ボミョンは考えた。そう考えると、晶子の思想的な転向³⁵ ウ・ボミョンは「反転」と表現している。は、ひとり晶子の問題ではなく、彼女の「強烈な情熱まで発酵させてしまう権力の横暴」こそが問題なのだとする。

3. 終わりに 成果と課題

この授業は、「君死にたまふことなかれ」、平塚らいてうとの「母性保護論争」、「軍備撤廃の第一歩」、「無産者の黎明期」、思想的な転向の4段階を通して、与謝野晶子の思想的な変遷を追いかける中で、それぞれの時代の晶子の思想と行動を高麗大生に考えさせた。学生たちは、初めて聞く「与謝野晶子」という日本人女性が時代とどう格闘したかを考えたことは間違いない³⁶。

「すべての資料を合わせて確実なのは晶子が真の愛国者だった」と高く評価したキム・ジョンヒョンは、「彼女の主体的、独立的な思想は今日のわれわれが学ぶべき価値がある」とした。たとえ、1930年代に転向したと

してもそれは問題ではない。それよりも、女性として人間としてしっかりと生きていったことを見つめるべきだというのであろう。ソ・ジュノも「ジェンダー葛藤がますます激しくなっている」韓国で（あるいは世界で）、「真の意味の性平等」を追求する際には晶子のような思想と行動が必要だと強調する。

一方で、ウ・ボミョンは「晶子の晩年の反転の原因」を考える中でなぜ金芝河を想起したのだろうか。それを解く鍵は「途方もない圧迫と脅威」という考えにある。「強烈な情熱」を持った一人の女性の思想を転向させてしまうほどの「権力」という存在をかなり意識しているといえる。これは、一昨年から昨年にかけての韓国の状況と無関係ではないだろう。ここから、例えばセウォル号をめぐる問題、大統領弾劾と選挙をめぐる問題などをくぐり抜けながら、韓国の学生たちが民主主義について真剣に考えていることがわかる。

課題としては、一コマの授業ではどうしても討論の時間が短くなってしまい、学生同士の意見交換が十分ではないことを再度痛感した。民主主義への共感を強く持っている韓国の学生たちであればこそ、意見交換によってその認識の深まりが期待できるだろう。

さらに、授業者は「晶子の思想の変遷を追いつつ、そこに通底するもの」を追求した（と思っていた）が、高麗大生は晶子の女性解放への熱い思いを感じ取っていた。この乖離をどう把握し、次に活かすかがもう一つの課題であると思われる^{*37}。

注

- *1 扱ってきた授業テーマを並べると、「織田信長ともっとも長く、激しく戦った一向宗徒」（2009年）、「豊臣秀吉はどのような人物だったか？」（2010年）、「福島の変遷史」（2011年）、「沖縄現代史」（2012年）、「富士山」（2013年）、「日本のソメイヨシノと韓国のワンボンナム（王桜）」（2014年）、「市川房枝の思想と行動」（2016年）、「与謝野晶子の思想と行動」（2017年）となる。2015年は時間の調整がうまくいかず、授業をしていない。
- *2 晶子の幼少期および少女時代について自叙伝的文章が、与謝野晶子（上笙一郎編）『自伝私の生い立ち 与謝野晶子児童文学全集 少女小説篇』（春陽堂書店、2007）にまとめられている。
- *3 与謝野晶子を取り上げていない中学校歴史教科書（2016年版）はない。本文ではなく、欄外の資料として彼女の写真と「君死にたまふことなかれ」を紹介する教科書が多い（日本文教出版、学び舎、帝国書院）。さらに若干のコメントをつけたものもある（教育出版、清水書院）。東京書籍

は一番詳しく、「戦争行為に疑問を持った」歌という記述とともに大町桂月（という名前は出していないが）との論争にも触れている。異色なのが、『みだれ髪』の著者としてしか取り上げていない自由社と、コラムで「奔放に恋をよんだ情熱の歌人」として「君死にたまふことなかれ」を取り上げている育鵬社版教科書である。育鵬社教科書は、太平洋戦争時の歌も取り上げ、晶子の行動を「11人の子の母親として、家族を愛し、家を重んじたその姿勢は、生涯を通じて歌に表されたのです」と解釈している。

高校日本史Aを見てみると、「君死にたまふことなかれ」を中心に記述しているのが、山川出版（2017年）と清水書院新訂版（2016年）である。本文もしくはコラムの形で「君死にたまふことなかれ」とともに女性保護論争を取り上げているのが、東京書籍（2017年）、第一学習社（改訂版、2017年）、実教出版新日本史A（2014年）で、特に実教新日本史Aは、晶子の思想を朝鮮の女性たちの運動と結びつけている。そして、晶子の思想をもっとも詳しく取り上げているのが、実教出版高校日本史A新訂版（2017年）である。本文で「君死にたまふことなかれ」の意味を記述しつつ、「歴史の窓」（98ページ）では女性保護論争を取り上げ、さらに「歴史の群像5 近代のなかの女性」で「少女というものは誰でも戦争ざらいなのです」という一節を資料として提供している。また、このコラムでは、知里幸恵や石井筆子とともに取り上げていることが注目される。

関連して、教員を志望する大学生へのアンケート調査で「授業で日露戦争を取り上げる際には何を教材にしますか」と聞いたところ、もっとも多くの回答は「『君死にしたもうちょうどなかれ』の与謝野晶子」だという。著者によれば、回答の「上位にある項目は戦争の苦悩を伝えるもの」であり、「なかでも与謝野晶子の詩は共感を持って迎えられている」と分析している（茨木智志「歴史教育における近代史認識の様相 日露戦争を中心に」、『上越教育大学研究紀要』20-2, 2001, 530ページ）。小学校学習指導要領で例示されている「42人」には入っていないにもかかわらずこれだけの共感を得ていることは特筆すべきである。「新指導要領42人の人物」を批判的に特集した『歴史地理教育』では「指導要領に登場しない人物」のなかで与謝野晶子を取り上げている（1990年3月臨時増刊号）。

また、早川紀代文・石橋富士子絵『絵本日本女性史3 近代・現代』（大月書店、2010）は、「元始、女性は太陽であった」の項で、短い文章ながら与謝野晶子と平塚らいてうらの論争を記述している（16ページ）。

- *4 授業にあたってさまざまな支援をしてくれた高麗大趙明哲教授と、資料を韓国語に翻訳してくれた李彦叔氏に感謝したい。
- *5 この歌は、「トルストイ伯『日露戦争論』」（杉村楚人冠訳、東京朝日新聞、1904年8月2日付）の返歌であるという。晶子はそれほどトルストイの思想の影響を強く受けていたが、後にはトルストイの「男女観」を鋭く批判するようになる（岩崎紀美子『与謝野晶子とトルストイ』文芸社、2012）。
- *6 裸婦像を掲載したことで発行が禁止された経歴を持つ『明

星」に「君死にたまふことなかれ」が検閲を通ったのは、この歌が私的なものであり、国家的な問題としては提起されず一女性の声がこれほどの反響を呼び起こすとは政府も予想していなかったからだと推定される (Steve Rabson, Yosano Akiko on War: To Give One's Life or Not: A Question of Which War, *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, Vol. 25, 1991).

*7 大町桂月「雑評録」,『太陽』1904年10月号,156~157ページ。

*8 与謝野晶子「ひらきぶみ」,『明星』1904年11月号,99ページ。

*9 これに対して桂月は、「もしわれ皇室中心主義の眼を以て、晶子の詩を検すれば、乱臣なり賊子なり、国家の刑罰を加ふべき罪人なりと絶叫せざるを得ざるもの也」と再反論している (大町桂月「詩歌の骨髓」,『太陽』1905年1月号)。国家主義者ゆえに桂月は、「君死にたまふことなかれ」第三連の「いかで」が反語であることを読み取れず、ひたすら政治的批判に走ったと評価されている (平子恭子「与謝野晶子の思想形成と思想 男女共同参画社会へ向けて」おうふう, 2012)。原文は総ルビである。ここで晶子は天皇制を批判しているわけではない。天皇は自らは戦いに出ていかないが、「おほみこころ」は深いから「互に人の血を流し、獣の道に死ぬよ」とか、「死ぬるを人の誉れとは……思されん」と言いたいのである。ここに晶子の天皇制ナショナリズムの発露が見てとれる。そして、このナショナリズムは晶子の一生を貫いているともいえるだろう。例えば、1911年の「雑記帳」でも、晶子は教育勅語が「日本人の依憑し遵守すべき倫理である許でなく、永劫に亘り世界上の文明人全体が必然に到達すべき大理想」と謳い上げている (『定本与謝野晶子全集 第14巻 評論・感想集1』講談社, 1980, 277ページ)。こうしたことから、平子恭子「与謝野晶子の道德教育論 修身教科書への考察と教育勅語尊奉」 (『日本の教育史学』40巻, 1997) は「天皇崇拜による勅語尊奉の精神が彼女に息づいている」と分析している。

*10 「婦人と思想」(1911年1月), 鹿野政直・香内信子編『与謝野晶子評論集』岩波文庫, 1994, 55ページ。

*11 晶子の弟鳳 篤三郎は堺市で和菓子店「駿河屋」を営んでいたが、徴兵されて後備歩兵第8連隊所属の輜重輸卒として旅順攻囲軍に参加した。兵士が故郷に宛てて手紙などで直接戦況を伝えることは禁止されていたものの、新聞が続出する負傷兵到着を報道していたこともあって、晶子にこの歌をつくらせたと考えられる (富井恭二「与謝野晶子の弟は旅順で戦ったのか」, 横山篤夫ほか『兵士たちがみた日露戦争 従軍日記の新資料が語る坂の上の雲』雄山閣, 2012)。

*12 ここでは『晶子詩篇全集』(実業之日本社, 1929, 77~78ページ)より引用した。『明星』1904年9月号の初出の表題は「君死にたまふこと勿れ」であり、ルビをふらない、表現を変えるなどその表記にかなり違いがある。

*13 こうした運動は、韓国の女性たちの一部に大きな影響を与えた。日本に留学していた羅蕙錫はらいてうや晶子を「個性を発揮しようとする自覚を持った婦人」として朝鮮の女

性たちもそのように成長するよう願った (『理想的婦人』,『学之光』3号, 1914, 韓国語)。羅蕙錫ら「新女性」と言われる人々の運動については、井上和枝「韓国『新女性』と『近代』の出会い」(日韓歴史共同研究委員会『日韓歴史共同研究報告書(第1期)第3分科報告書』, 2005)やShin, Jiweon, "Social Construction of Idealized Images of Women in Colonial Korea: the New Woman and Motherhood", In Tamara L. Hunt & Micheline R. Lessard eds. *Women and Colonial Gaze*, New York: Palgrave, 2002を参照。さらに、チェ・ジョンア「東アジアの文学と女性 羅蕙錫, 与謝野晶子, 張愛玲を中心に」(『人文論叢』72-1, 2015, 韓国語)は、これら韓日中の3人の女性はいずれの談話体系において女性的頭木を跳び越えて新しい女性指標をうち立てようとした先駆的人物として高く評価している。

また、晶子が1915年に発表した「貞操は道德以上に尊貴である」という一文を中国人・周作人が翻訳・発表した「貞操論」(『新青年』4巻5号, 1918)は、胡適や魯迅の知るところとなり、女性を虚偽な旧道德から解放しようとする思想を鼓舞したという (劉軍「『新青年』時代の周作人と日本『貞操論』を中心に」,『人文学研究所報』37号, 2004)。さらに、1920年代には晶子の評論が翻訳されて、女性雑誌に掲載されていった。『新婦女』や『婦女評論』などが刊行され、中国における女性解放言説に影響を与えた (張競「与謝野晶子と中国 1920年代前半に翻訳された評論について」,『明治大学教養論集』338号, 2000)。

*14 香内信子「『母性保護論争』の歴史的意義」『論争』から『運動』へのつながり,『歴史評論』195号, 1966, 11ページ。

*15 木下比呂美「母性保護論争と子どもの権利」,『教育学研究』46-1号, 1997, 3ページ。また、晶子とらいてうの論争を検討した松村由利子も、本当に「母性保護」の本質に迫っていたのは晶子だったと評価している (『与謝野晶子』中公叢書, 2009)。ちなみに松村は晶子の晩年の戦争協力には触れていない。

*16 野澤正子「養育とその社会的援助のあり方について」() 母性保護論争の再評価への試み,『社会問題研究』39-2号, 1990, 7ページ。この論争を通して、「精神的にも、経済的にも、自営、自活、自立、自営する可能性を持って居る個人が、父にせよ、母にせよ、妻にせよ、国家の保護に由って受動的隷属的な生き方をするのは、個人の威厳と自由と能力とを放棄する意味に於いて反対するのです」(与謝野晶子「平塚・山川・山田女史に答ふ」,『定本与謝野晶子全集 第17巻 評論・感想集4』講談社, 1980, 159ページ)と、晶子の国家観が明確になる。

*17 実際の「母性保護論争」は、晶子、らいてうに対して山川菊米もかかわって展開された。したがって、菊江の主張も含めて考えるとさらに豊かな「論争」像が生まれると想像されるが、一方で触れたことのない3人の外国人女性の主張を短時間で理解するのは無理だという授業者の判断によって、菊江の主張はあえて取り上げなかった。

*18 晶子は、『横浜貿易新報』(1918年3月17日付)に「何故の出兵か」という文章を書いている。「無意義な出兵のた

めに、露人を初め米国から（後には英仏からも）日本の領土的野心を猜疑され、嫉視され、その上数年にわたって撤兵することが出来ずに、戦費のために再び莫大の外債を負い、戦後にわたって今に幾倍する国内の生活難を激成するならば、積極手的自衛策どころか、かえって国民を自滅の危殆に陥らしめる結果となるでしょう」（鹿野政直・香内信子編、前掲書、195ページから再引用）。さらに、「婦人なるが故にわざとこういう問題に目を閉じているようなことがあれば、それは国民としての権利を行使する義務を怠ったもので、新しい国民道徳からいえば罪悪の一種に当ります」（同前、192ページ）と女性の奮起を促した。

*19 与謝野晶子「食糧騒動について」（『太陽』1918年9月号）。同前、211ページから再引用。

*20 同前、215ページ。

*21 中国に対する「二十一カ条の要求」の支持など、対外主戦論者だった芑堂は晶子に「敗徳者」と批判されていた。しかし、1919年に欧米視察をした芑堂が目にした第一次世界大戦の現実が彼の考えを軍縮へと導く。その後、軍備縮小をめぐる憲政会を除名されるも、国民に軍縮を力強く呼びかけていった。そうした折り、芑堂は軽井沢の別荘莫哀山荘に与謝野夫妻を迎えた。ここから芑堂と晶子の交流が始まる、という（上田博「尾崎行雄『議会の父』と与謝野晶子」三一書房、1998、161～177ページ）。

*22 この時期に、島木赤彦（1923年）、斎藤茂吉（1930年）、野口雨情（1926年）、北原白秋（1929年）、志賀直哉・里見弴（1929年）らが満鉄の招待で「満洲」などを旅行している（香内信子「与謝野晶子の『満蒙遊記』」、西田勝『近代日本と「満洲国」』不二出版、2014、352ページ）。

*23 与謝野晶子「無産者の黎明期」、『定本与謝野晶子全集 第19巻 評論・感想集6』講談社、1981、405ページ。

*24 与謝野晶子「満蒙遊記」（1930年5月17日）、逸見久美ほか編『鉄幹晶子全集 第26巻』勉誠出版、2008、4ページ。

*25 与謝野晶子「満蒙への移住」（1928年12月24日）、『与謝野晶子評論著作集 第19巻』龍溪書舎、2002、522～523ページ。

*26 与謝野晶子「傍観者の言葉」（1929年7月12日）、『街頭に送る』講談社、1931、97～98ページ。

*27 入江春行『与謝野晶子とその時代 女性解放と歌人の人生』新日本出版社、2003、165～166ページ。

*28 与謝野晶子「時局雑感」（1933年10月15日）、『与謝野晶子評論著作集 第20巻』龍溪書舎、2002、403ページ。

*29 「一隅より」、『与謝野晶子評論著作集 第1巻』龍溪書舎、2001、449～450ページ。

*30 これについては、李成市^{リソンシ}「『韓国併合』と古代日朝関係史」（『思想』、2010年1月号）を参照。

*31 与謝野晶子「東四省の問題」、『鉄幹晶子全集 27』勉誠出版、2009、124ページ。

*32 「ああ大御代の凛凛^{リリ}しさよ、人の心は目醒めたり。／責任感に燃ゆる世ぞ、「誠」一つに励む世ぞ。／……武人にあらぬ国民も、尖る心に血を流し、／命を断えず小刻みに、国に尽すは変り無し。／……無力の女われさへも、かくの如くに思ふなり。／況やすべて秀でたる、父祖の美風を継げる

民……」、『定本与謝野晶子全集 第10巻 詩集2』講談社、1980、444～446ページ。

*33 「桐壺」の出だしは「どの……様の御代であつたか、女御とか更衣とか云はれる後宮が」と「天皇」が伏字となっている（『鉄幹晶子全集 第28巻』勉誠出版、2008、3ページ）。晶子は生涯を通じて源氏物語を二度にわたって翻訳・出版している。一度目は『新訳源氏物語』（金尾文淵堂、1912～1913）である。これについては、関礼子「与謝野晶子『新訳源氏物語』が直面したもの」（『女性表象の近代文学・記憶・視角像』翰林書房、2011）を参照。

*34 『短歌研究』1942年1月号、58ページ。この号は、「宣戦の詔勅を拝して」という特集を組んでいる。この歌の「四郎」は、本稿3ページ写真の前列左から二人目の4男アウギュスト^{イック}（昱）である。ここで、当時の多くの歌人らが「征く」と表現していたが、晶子はそうした表現を使わなかったことから「戦争に対して距離を置いている」（入江春行、前掲書、180ページ）とし、いわゆる「待機」の実践として評価しているが、そこまで言えるかどうかは疑問である。

*35 この転向について、晶子の市民社会思想を高く評価する広岡守穂は「平等化されたブルジョア的価値観を力強く語ったこと」こそが重要だとする（『ジェンダーと自己実現』有信堂、2015、191ページ）。そして、晶子に1930年代以後に戦争協力の短歌があったことが批判されるが、それは晶子が「市民社会の思想家であったことを傷つけるものではない。市民社会の思想が平和主義とは限らないからである」（193ページ）と主張する。「男女平等はデモクラシーをおし進める重要な力でありつづけている」（321ページ）と強く訴える広岡の論に平和の問題はどう位置づけるのだろうか。

*36 金星社版教科書『東アジア史』（高校、2018年）は、単元「抗日戦争と国際連帯」の「反帝・反戦のための連帯」の冒頭に与謝野晶子の写真とともに詩「君死にたまふことなかれ」を載せている（162ページ）。そこでは「戦場に家族を送り出した人々の気持ちをよく表していたが、危険な思想として批判された」と紹介されている。

*37 かように、ナショナリズムとジェンダーの問題は一筋縄ではいかない。上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』（青土社、1998）を参照。

参考文献

入江春行『与謝野晶子とその時代 女性解放と歌人の人生』新日本出版社、2003

鹿野政直・香内信子編『与謝野晶子評論集』岩波文庫、1994

香内信子『与謝野晶子 昭和期を中心に』ドメス出版、1993

平子恭子『与謝野晶子の思想形成と思想 男女共同参画社会へ向けて』おうふう、2012

山本千恵『山の動く日きたる 評伝与謝野晶子』大月書店、1990 [1986]